



筑紫女学園大学リポジト

The Possibility of University and Community Collaborative Support in Child-rearing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大元, 千種, 大鶴, 香, 渋谷, 登美子, 原田, 博子, 森田, 理香, OHMOTO, Chigusa, OZURU, Kaoru, SHIBUTA, Tomiko, HARADA, Hiroko, MORITA, Rika メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/71

子育て支援における地域と大学の協働の可能性

大元 千種・大 鶴 香・洪 田 登美子・
原 田 博 子・森 田 理 香

The Possibility of University and Community Collaborative Support in Child-rearing

Chigusa OHMOTO・Kaoru OZURU・Tomiko SHIBUTA・
Hiroko HARADA・Rika MORITA

はじめに

日本の子育て支援が政策として始まったのは1994年のいわゆる「エンゼルプラン」からである。この政策は1989年に合計特殊出生率が1.57となり、少子化対策を検討することが必要になったからであり、「仕事と育児の両立支援」を第一にあげ、保育サービスの充実や多様化を掲げ子育て支援が始まった。その後、地域のつながりが希薄になったことや、虐待の増加などの社会的な背景や、有職の母親よりも専業主婦の方が育児不安が高いことなどが報告され、仕事をしているかいないかに関わらず、子育てを行うすべての家庭を支援することが必要と考えられるようになった。

服部・原田（1991）は、1980年出生の子どもを対象とした子育て実態調査をまとめた「乳幼児の心身発達と環境－大阪レポートと精神医学的視点」の中で母親の育児不安を招く要因として、①母親が子どもの欲求がわからないこと、②母親の具体的な心配事が多いこと、及びその未解決放置、③母親に出産以前の子どもの接触経験や育児経験が不足していること、④夫の育児への参加・協力が得られないこと、⑤近所に母親の話相手がないことの5点をあげている。さらに、原田（2006）は、その20数年後に行われた調査結果を「子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートに見る子育て現場と子ども虐待予防」にまとめ、「大阪レポート」と比較している。それによれば、1歳6か月健診時で「育児でいろいろすることは多いですか」との問いに、「はい」と答える母親が「大阪レポート」では10.8%だったのが、「兵庫レポート」では31.8%と約3倍に増加している。さらに、「兵庫レポート」では「子育てを大変と思いますか」の問いに、「はい」と答える母親が

1歳6か月健診では64.4%、3歳児健診では63.3%と約3人に2人となっている。また、「近所でふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人がいますか」という質問に、4か月健診時では「いない」と回答したものが、32.0%であり、「大阪レポート」と比べて2倍以上に増加し、約3人に1人の母親が孤立している。ここ20年間を考えると、様々な子育て支援策が展開されているが、子育てに関する不安や負担感が増大していること、地域で孤立している母親が増えていることがこれらのデータからうかがえる。

地域における子育て支援に関しては、1995年に地域の子育て支援を目的として地域子育て支援センター事業が始まったが、地域子育て支援センターは保育所に併設されていることが多かった。2000年の柏女らの報告によると、保育所実施型の地域子育て支援センターの専任職員の有する資格は、89.1%が保育士であった。その後、2007年に地域子育て支援センター拠点事業に再編され、センター型、ひろば型、児童館型の3つの形態になったがセンター型は従来のセンター事業を引き継いでいるところも多く、保育士が専任職員として従事していることが多い。

2008年に改訂された保育所保育指針では総則の中で、「保育所は入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである」とし、保育に支障のない限りにおいて、地域の子育て支援の拠点として積極的に努めるようにと明文化され、保育所での地域の子育て支援の努力義務が一層鮮明となった。つまり、地域における子育て支援に関しては、保育士や保育所が担ってきた役割が大きい。

しかし、地域子育て支援における専門性は保育士の専門性だけでは難しいことが指摘されている。橋本・日浦（2002）は、保育所と地域子育て支援センターの相違を次のように述べている。保育所は保育士の実際の業務の大半は主として乳幼児を保護者に代わって保育するケアワークであり、子どもを直接援助する援助者である。他方、子育て支援センターの職員は親子を対象とし、子どもは保護者を通して援助を受けることから間接的な被援助者となる。さらにその上で、地域センター職員にはコーディネート力、コミュニケーション力、引き出す力が求められるとしている。また、原田（2006）は、「保育園・幼稚園・学校などの先生方は、従来主に子どもに関わってきた。しかし、今求められているのは、子育て中の親を支え、励まし、育てることにより、子どもを育てようという、親支援である。ところが、日本の専門職は子どもへのかかわりについては学んでいるが、“親を育てる”という点に関しては教育を受けてはいないし、技術も持ち合わせていない」と述べている（p. 293）。また、大元・大鶴・渋谷・原田・森田（2012）は、子育て支援を行っている保育士に聞き取り調査をし、子育て支援活動を通して感じた大変さと難しさについてまとめた。その結果、保育士たちは、継続的に来てもらうための雰囲気づくりや関係づくり、特別な配慮が必要な子どもへの対応、特別な配慮が必要な親への支援に難しさを感じていた。さらに、支援者として自分の態度や言動をどうしたらよいか、子育て支援とは何かという迷いなどを抱いていた。子育てに関する問題が多様化する中で、保育士は様々な難しさに直面していると考えられる。

地域子育て支援は保育の専門性だけでは難しいことが指摘されている一方で、保育所で勤務していた保育士は、実際に子育て支援を行っていく中で、親や親子と対応する様々なスキルや能力を身につけていくことも報告されている。小池・斎藤・角張（2008）は保育所での保育経験を重ねてきた保育士は支援センターに配属されることによって違和感を抱いていることが多いと言及したうえで、支援センターを経験することで、子ども、親、センター・保育所のそれぞれに対する理解が深まったと述べている。さらに、大元他（2012）は保育士が地域の子育て支援活動を通して、自分がどのような態度や言動をとればよいのかという難しさを感じながらも、自分の中で培われたものはコミュニケーションであるというように、試行錯誤しながら実践の中で多様なスキルを身につけていくことを述べた。

このように、子育て支援に従事した保育士は様々な難しさに直面すると同時に、実際に支援を行う中で様々な工夫をしながら身につけた知識やスキルを自分の中に蓄積していると考えられる。しかし、これらの知識やスキルの蓄積は保育士個人の努力によって成り立っているため、新たな知識を獲得できる場や支援者同士の情報交換の場の必要性が指摘されている（大元他、2012）。そのような役割を担う機関のひとつに大学があげられる。

大学も地域の一資源であり、地域の子育てを支える役割を果たしている（大元他、2010）。その支援のなかでも、子育て支援をしている人を支援する間接支援を行うことで、それらの場や人と協働しながら地域へ貢献することはできないであろうか。大学が支援者に対する間接支援を考える際には、子育て支援の現状を理解し、そこで培われた知識やスキルを支援者と大学が共有しながら、お互いの専門性が生かせるように共に子育て支援について考えていくことが必要であると考えられる。そこで本研究では保育士が実際に子育て支援を行うにあたり、どのような工夫や配慮を行っているのかを明らかにすることを第一の目的とする。また、支援が真の支援になるためには、支援者のニーズを聞き、そのニーズに合わせた支援を考えていくことが必要である。そこで、子育て支援の支援者（保育士）に大学が協力できることを尋ね、大学が子育て支援に関して地域とどのように協働できるのかを検討することを第二の目的とする。

方法

1. 研究協力者

F県近郊において地域子育て支援活動を行っている7名の保育士に本研究の協力依頼を行った。研究協力者の詳細についてはTable 1に示す。実施している子育て支援の形態については、サロン（開催時間内であれば自由に入出りできる）、遊びの広場（開始時間、終了時間が決まっており、活動プログラムがある）、相談（育児相談、発達相談など）の3つに分類した。

また、研究協力者の所属は保育所及び、地域子育て支援拠点事業センター型である。

2. 手続き

2011年1月から3月に同意が得られた7名の現役保育士に対して、個別に半構造化面接を行っ

Table 1 研究協力者の概要

協力者	勤務先	性別	保育士歴	支援経験	実施している子育て支援		
					サロン	遊びの広場	相談
A 保育士	保育所	女	23 年	12 年	○	○	○
B 保育士	保育所	女	27 年	8 年	-	○	○
C 保育士	保育所	女	33 年	5 年	○	-	○
D 保育士	支援センター	女	16 年	5 年	○	○	○
E 保育士	支援センター	女	15 年	11 年	○	○	○
F 保育士	保育所	女	10 年	1 年	○	○	-
G 保育士	支援センター	女	20 年	2 年	○	○	○

た。ただし、7名中1名の面接に園長が同席したが、分析には園長の発言を対象として取り扱わないこととした。保育士歴や子育て支援にかかわった年数、子育て支援の形態などを所定の質問用紙に記入してもらい、その後インタビューを行った。内容はICレコーダーに承諾を得て記録した。質問項目は、①子育て支援活動の概要、②子育て支援活動を通して感じる大変さと難しさ、③子育て支援活動を行っている際の工夫や配慮、④子育て支援活動に対して大学が協力できること、⑤子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたものについてである。研究協力者との自然な会話の流れを重視し、質問の順序は適宜変更した。インタビュー時間は40分から1時間半程度であった。その後、ICレコーダーに記録した研究協力者7名のインタビュー内容を書き起こし、逐語録を作成した。本論文では、③子育て支援活動を行っている際の工夫や配慮と、④子育て支援活動に対して大学が協力できることについて分析をする。なお、②子育て支援活動を通して感じる大変さと難しさ、⑤子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたものについては大元他（2012）にて報告した。

3. 倫理的配慮

インタビュー開始時に本研究の目的を口頭で説明した。研究協力への同意意思を確認し、署名を得た。また、ICレコーダーに記録することを口頭にて承諾を得た。

結果と考察

1. 子育て支援を行う上での工夫・配慮

質問項目の③子育て支援活動を行っている際の工夫や配慮について言及している部分を文章単位で抽出し、要約（コード化）を行った。また、研究協力者についてのサンプルコードを付した。そこから、得られたコードを比較し、意味が似ているものをまとめてカテゴリー化を行った（サブカテゴリー化）。さらに、サブカテゴリー間の検討を行い、意味が似ているものをまとめて上位カテゴリーとした。これらの作業から20のコードを抽出し、3カテゴリーと8サブカテゴリーを生成した（Table 2）。カテゴリー、サブカテゴリー間の関係を図示したものをFigure 1に示す。本文中ではカテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、コードを「 」と、研究協力者の発言の

一部を「」斜体で示した。以下、カテゴリーごとに結果と考察を記述する。

(1) 親との関係づくり

カテゴリー《親との関係づくり》は、〈初対面の人へのアプローチ〉、〈関係づくりのための話し方〉、〈関係づくりのための聴き方〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

〈初対面の人へのアプローチ〉は「初対面の人に対して話すことと聴くことの按配の難しさ」、「初めての人への声かけ、話し方」、「関係づくりのための話し方、声かけ」、「将来の相談につながる関係づくり（色々な人に声をかける、表情、傾聴）」の4つのコードから構成され、7名の保育士のうち4名がこのサブカテゴリーに含まれるコードを産出していた。ここでは、「初対面の人と話す大変さ」について言及したうえで、「仲良しになるためには話さなくてはいけない。けれども踏み込みすぎではいけない。聞き手でもあらなくてははいけない」といった聞くことと話すことのバランスについて配慮していることや、「初めての人には差し向かいで話し込む」というように初対面の場合はあえて向き合って話すようにしていること、あるいは「子どもと遊んでみて

Table 2 子育て支援をしていて気をつけていること（工夫、配慮）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	5年 以上	3年 未満
親との関係づくり	初対面の人への アプローチ	初対面の人に対して話すことと聴くこと の按配の難しさ	○	
		初めての人への声かけ、話し方	○	
		関係づくりのための話し方、声かけ		○
		将来の相談につながる関係づくり（色々 な人に声をかける、表情、傾聴）		○
	関係づくりのための 話し方	子どもと関わり成長をほめることでコ ミュニケーションをとる	○	
		気分を害さない話し方	○	
	関係づくりのための 聴き方	相手の考えていることをくみ取る	○	
		否定せずに受け入れる	○	
		話しかけやすいように距離を保ってそば にいる	○	
集団を運営するための 工夫	雰囲気づくり	親がとけこめるような環境をつくる	○	
		継続してきてもらうために楽しく過ごし てもらうことにエネルギーをつかう	○	
		再度、利用しやすい雰囲気づくり	○	
		親が子どもへ関わることのできる環境づ くり	○	
	プログラムの工夫	プログラムで同じ遊びを繰り返す	○	
		プログラムに季節のものを取り入れる	○	
	役割分担	相談内容に応じての役割分担	○	
他の地域資源への 橋渡し	専門機関へつなぐ	他機関への情報提供	○	
		専門の療育機関につなぐ	○	
	人的資源へつなぐ	民生委員等につなぐ	○	
		親同士をつなぐ	○	

(中略) ちょっとずつですね」というように、子どもの話題を中心に親に話しかける努力をしていることが語られた。さらに、特定の親に焦点を当てるのではなく、「一人の親だけではなく、色々な人に声をかける」ことも語られた。ここから、保育士は初対面の親にどのように関わるかについていかに意識しているかが分かる。しかし、4名の保育士が初対面でのアプローチの重要性について指摘をしていたが、具体的なアプローチの方法は保育士によって異なる。子どもを媒介として親に少しずつアプローチする保育士や、直接、親と向かい合って話すことを強調した保育士、

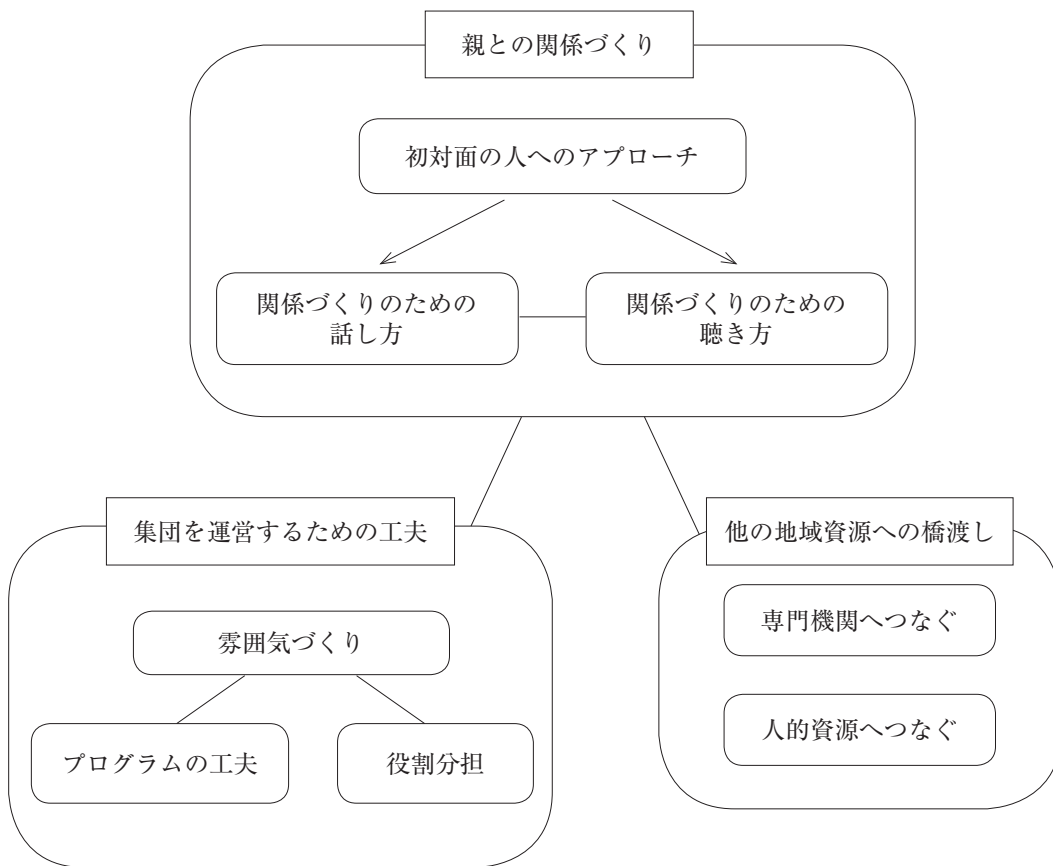


Figure 1 子育て支援をしていて気をつけていること（工夫、配慮）

聴くことと話すことの按配について指摘した保育士もみられた。これらにはそれぞれの経験や保育観などが反映されていることによるといえよう。

〈関係づくりのための話し方〉は「子どもと関わり成長をほめることでコミュニケーションをとる」、「気分を害さない話し方」の2つのコードから構成され、1名の保育士によって産出された。保育士からは「子どもをほめることから始める。成長をほめるとお母さんに笑顔が出る。それをきっかけにコミュニケーションをとり、その時にちょっと絵本の紹介をしたりする」ことが語られた。さらに、親の気分を害さないように言葉に気をつけながら「色々なことをほめて、最後にこんなことをして欲しいというのが信頼関係が出来れば言える」ということが語られた。子育て

てに重要な情報を伝えるために、いきなり話をするのではなく、まずは関係をつくってから情報を伝えるという工夫を行っていることがうかがえる。

〈関係づくりのための聴き方〉は「相手の考えていることをくみ取る」、「否定せずに受け入れる」、「話しかけやすいように距離を保ってそばにいる」の3つのコードから構成された。保育士から「個別の相談であれば、相手の考えていることをいかにくみ取るか」ということ、「お母さんたちにいろいろ言われても否定は絶対しない（中略）何でも話は聴いて」ということ、さらに「何かを背負っていて、言いたいけど言えない（親に対して）、（中略）距離を保って傍にいるようにはしている」という、親との関係を深めるために親の話聴くことの重要性が指摘された。これらは2名の保育士から産出された。この2名は子育て支援の経験は10年以上であり、保育士としての経験年数の半分以上は子育て支援に携わっている。親を対象とした支援に深く関わったことで、親に積極的に話しかけるだけでなく、親が話したいタイミングを逃さずに待つこと、親が話している話の背景にまでくみ取る努力をすること、親の話はどのようなものでも受け止めること、といった聴くことの重要性に意識が向いているといえる。

子育て支援の経験年数を見ると、〈初対面の人へのアプローチ〉については、子育て支援に携わって5年以上の保育士、3年未満の保育士ともに言及していたが、〈関係づくりのための話し方〉、〈関係づくりのための聴き方〉については5年以上の保育士のみが言及していた。初めて会う親子に対するアプローチについては、子育て支援現場が長い保育士も短い保育士も意識が向いているが、子育て支援現場で経験を積むことによって長期的な見通しを持って親子に関わることに意識が向くようになるといえよう。

（2）集団を運営するための工夫

カテゴリー《集団を運営するための工夫》は〈雰囲気づくり〉と〈プログラムの工夫〉、〈役割分担〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

〈雰囲気づくり〉は「親がとけこめるような環境をつくる」、「継続してきてもらうために楽しく過ごしてもらうことにエネルギーをつかう」、「再度、利用しやすい雰囲気づくり」「親が子どもへ関わることのできる環境づくり」の4つのコードから構成されていた。「単発だからその場で一瞬だからそこですね。継続で来て下さるかどうかも1回で決まる。（中略）できるだけ楽しく過ごしてもらうために全神経を注ぎます」、「また、来やすいように、なんとなく雰囲気づくりというか、そういうのは心がけます」というように、子育て支援の場への参加は自由意志のために、継続的に親子が参加するかどうかは親がその場に対する印象をどのように持つかが大きいことを認識しており、そのための雰囲気づくりに努力していることがうかがえる。また、「きょうだいで参加されていたら、連れてこられた赤ちゃんとお兄ちゃんにあたふたしているのが分かるんですね。（中略）（赤ちゃんを）私たちがひきとったり」など、親が子どもへゆっくりと関わる事が出来るようにするための環境づくりにも配慮している。先述した（1）親との関係づくりでは、保育士と親との個人的な関係づくりのために尽力する様子がうかがえたが、同時に親が子育て支援という場との関係がつけられるように、言い換えると、集団の中に自分の居場所を見つ

けることが出来るための配慮を行っていることが明らかとなった。

〈プログラムの工夫〉は「プログラムで同じ遊びを繰り返す」、「プログラムに季節のものを取り入れる」の2つのコードから構成された。プログラムに関しては「親子の参加は1回だけなので、内容を忘れてしまったら親も子ども楽しくないので何回もやったり」というように、繰り返して覚えてもらうことでその場をより楽しんでもらう工夫をしたり、「歌などに季節のものを取り入れたり、窓が大きい部屋では雨が降っているね、などと日常生活を取り入れたり」といった季節感や日常の営みを楽しめるような配慮がされている。子育て支援の場を利用する親の中には、子育てに対する思いはあっても、具体的にどのように子どもに関わってよいか分からない親もいることが考えられる。これらの工夫は、その場のプログラムを楽しむだけでなく、日常に帰った時に親が子どもと楽しむ際の関わり方のヒントになり、親子の豊かな関わりを促すことになり得るといえよう。

〈役割分担〉は「相談内容に応じての役割分担」の1つのコードから構成された。ここでは、親からの相談の内容によって、対応する保育士を変えているというものであった。保育士という同じ職種であっても、それまでの経験やその人自身の持ち味が異なるため、状況に応じて適切に対処しているといえる。

(3) 他の地域資源への橋渡し

カテゴリー《他の地域資源への橋渡し》は〈専門機関へつなぐ〉と〈人的資源へつなぐ〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

〈専門機関へつなぐ〉は「他機関への情報提供」と「専門の療育機関へつなぐ」の2つのコードから構成された。地域の保健センターなどと連携して気になる子どもに対応することや、親から自分の子どもについて相談を受けた場合に、必要に応じて地域の相談機関や療育機関を紹介することが語られた。子育て支援は誰もが利用できる場所である。一方で、あらゆる状況を抱えた親子に対して専門的な対応をするには限界があるといえよう。その時に、専門機関と連携して親子に対応することが重要と考える。

〈人的資源へつなぐ〉は「民生委員等につなぐ」と「親同士をつなぐ」の2カテゴリーから構成された。「地域の民生委員や母子保健推進委員とも連携し、面識を持ってもらう」ことや「初めて来たとか、引っ越して来たばかりということを話された人には、近くの人を紹介したりする」ことが語られた。地域での人間関係をつくることで親が孤立しないような配慮をしているといえる。

カテゴリー《親との関係づくり》と《集団を運営するための工夫》、《他の地域資源への橋渡し》から、いかに保育士が親との関係を重視し、個人的な、そして集団、さらに地域との関係を作るための配慮をしているかが分かる。先行研究では、子育て支援活動を通して感じた大変さと難しさについて、“継続的に参加してもらうための働きかけ”があげられていた(大元他, 2012)。地域の子育て支援活動という場では活動への参加は強制されるものではなく、親の自由意思によるものである。継続的に参加してもらうことの難しさを感じているがゆえに、親との関係が切れない

いようにあらゆる配慮を行っている。さらには、子育て支援の場から離れたところでも、親が孤立しないように親と地域の間関係をつくっておくように努力をしている。親と保育士、親と子育て支援の場(集団)、そして親と地域というように、それぞれの層との関係を構築することによって、親が安心して子育てをできるような状況をつくり、さらに、困ったときには支援を受けられるような状況を作ろうとしている。たとえ子育て支援現場との関係が切れたとしても、地域との関係を作っておくことで対応出来るような体制づくりをしているといえよう。

2. 子育て支援活動に対して大学が協力できること

質問項目の④子育て支援活動に対して大学が協力できることについて言及している部分を文章単位で抽出し、要約を行った。その結果9つの具体的支援内容が得られ、それらを6つの支援内容に分類した。これらの支援内容は直接支援と間接支援の二つの支援形態に分けることができた。すなわち、一つは大学の教員が直接子育て支援の現場に出て行って行う直接支援と、もう一つは子育て支援者への支援を行う間接支援である (Table 3)。以下、支援形態ごとに結果と考察を記述する。本文では、支援内容を“ ”、具体的な支援内容を‘ ’、研究協力者の発言の一部を「 」斜体で示した。

(1) 子育て支援活動への直接支援

子育て支援活動に対する直接支援は“相談窓口”、“講座の講師”、“子育て支援現場”への参加という3つの支援内容から構成されており、研究協力者の7名中3名が発言していた。

“相談窓口”は‘親からの相談窓口’を設置することである。その具体的内容としては、「いろいろ子育ての悩みとか、ここに行ったら相談できるっていうのがありますので、いろんなところがあればいいなって。(中略) 相談できる場があれば」と発言されていた。子育て支援センターや保育所、幼稚園などとともに親が相談できる場の一つとして大学に期待が寄せられていた。

“講座の講師”は‘親対象の講座の講師’である。子育て支援者のなかには、母親たちが高学歴化していることや、親たちに「今いろんな情報がはいる」ことを踏まえ、専門家からの話を親たち

Table3 子育て支援に対して大学が協力できること

支援形態	支援内容	具体的な支援内容	
直接支援	相談窓口	親からの相談窓口	
	講座の講師	親対象の講座の講師	
	子育て支援現場への参加	気になる子ども達を対象とした支援への協力	
		助産師、看護師など専門職からの支援 (乳児対象)	
間接支援	相談窓口の設置	職員からの事例相談	
	支援者対象の研修会	新しい情報に関する研修会 (離乳食・予防接種・断乳など)	
		専門的知識の研修会 (心理) (発達) (障がい) (保健) など	
		より良い支援をしていくための検討会	
支援者対象の情報交換の場	子育て支援に関する情報交換の場		

に提供してほしいという、次のような声があった。「保育士だけの観点じゃなくて、もっとこう講座とかで専門的なお話とか聞いてもらったりすると（中略）情報ばかりでその中から自分にあつたものを探したり、これはこう書いているとか、こうしなきゃいけないとか、ほんととはどれが正しいのか、専門のお話を聞く機会っていうのがあるといいのかな」ということである。

“子育て支援現場への参加”の具体的内容は‘気になる子ども達を対象とした支援への協力’と‘助産師、看護師など専門職からの支援（乳児対象）’であった。‘気になる子ども達を対象とした支援への協力’は、子どもの発達が気になった親が療育機関を訪れるまでの空白の期間の対応に対しての協力である。「支援センターにそういう気になる子たちを対象とした教室はあるんですけど、でもそれもやっぱり専門の方は入ってないので」と、そのつなぎの期間に大学の専門家が期待されていた。‘助産師、看護師など専門職からの支援（乳児対象）’は、子どもが小さい頃から子育て支援の場に来ていたら継続して来やすいことから、「もう少し低年齢の子どもたちにも支援が行き届くように」助産師に参加してほしいという要望があった。

子育て支援者が保育士であることから、保育の領域についての親からの相談や子育てアドバイスに対しては保育士としての専門性をもって応えることができるが、子育て支援の場になると保育士としてだけの対応に不安をいただいていることがうかがえる。高学歴の親や発達上気になる子どもを抱えた親など様々な事情の親子が参加するところが子育て支援の場である。保育士として支援するだけでなく、専門家の力を大学に借りることによって、色々な親たちに安心して子育て支援の場に参加してほしいという願いを発言にみることができる。

（2）子育て支援活動への間接支援

子育て支援に対する間接支援は“相談窓口の設置”、“支援者対象の研修会”、“支援者対象の情報交換の場”の3つの支援内容から構成されており、研究協力者全員がこれらの内容を含む発言をしていた。

“相談窓口の設置”は、具体的には‘職員からの事例相談窓口’であり、「園に対して『相談していいよ』って網を張ってもらおう」ことや、支援者を支援する「スーパーバイズ的な存在としての大学の先生」が求められていた。

“支援者対象の研修会”は‘新しい情報に関する研修会’と‘専門的知識の研修会’であった。‘新しい情報に関する研修会’は、特に離乳食、予防接種、断乳などについて以下のように期待されていた。「いろんな面での最新の情報っていうのが自分たちもどこかで頭に入れておかなきゃいけない、お母さんたちの相談に乗るうえでも（中略）、離乳食にしても断乳にしても、予防接種にしても変わってきているから」と、今の母親たちの相談を受ける立場として、大学の専門家から最新の情報を得たいという声であった。また、‘専門的知識の研修会’は7名中6名から要望が出されていた。「専門的知識の部分（の援助）がほしい、心理やからだのことがある。病気だとかであれば保健の看護の知識もほしい」、「専門的なことを聞きたいですよね。発達とか精神的な部分とかお母さんも含め。まずは私たちが勉強したい」など様々な方面の専門的知識を得たいという声があった。なかでも親子の心理、子どもの発達、子どもの障がい、病気や怪我の対応

も含めた保健についての研修の期待が多かった。

“支援者対象の情報交換の場”は‘より良い支援をしていくための検討会’と‘子育て支援者のための情報交換の場’であった。‘より良い支援をしていくための検討会’は、現場の事例報告や分析など検討する場を持ち、そこに大学の教員が参加することである。‘子育て支援者のための情報交換の場’は「他のところがどんなことをやっているのか聞きたい。自分たちでやっているのが広がらないし、みんなで話せる場とかがあったらいいです」のように、大学が情報交換の場を提供し、子育て支援者たちの情報交換や学び合いの仲立ちをしていくことなどが求められていた。

間接支援は、子育て支援担当者に対する支援が中心であるが、子育て支援者の要望には保育士職だけで子育て支援をすることに対する不安が見られる。自分たちが行っている子育て支援や親子に対する理解についてもこれで良いのであろうかという不安が伴っており、それに対しての相談や確認などのために大学や専門家の力を借りたいということである。

(3) 子育て支援をおこなっている保育所に対する支援

子育て支援活動への大学の協力の他に、保育所で子育て支援をしている保育士から、子育て支援だけでなく保育所運営全体に大学が協力できることについての発言があった。これは、‘職員研修会’、‘事例検討会’、‘巡回相談’、‘職員の心理的サポート’であった (Table 4)。

Table 4 子育て支援を行っている保育所に対して大学が協力できること

支援形態	具体的な支援内容
保育所への支援	職員研修会
	事例検討会
	巡回相談
	職員の心理的サポート

‘職員研修会’は「保育のあり方もいろいろあるので、今までやっていたことの意味やいろいろなやり方を学びたい」という保育の見直しも含めて、保育についての理論や方法についての研修が大学の専門家へ期待されていた。‘事例検討会’、‘巡回相談’についても、保育所にいる子どもたち全体に関わった検討会や相談が言及された。また、‘職員の心理的サポート’は「職員の心身ともにどう健康にしていくか」ということについて大学への期待の声があった。なかでも職員の心理面でのケアに対する支援への期待であった。

子育て支援に対して大学が協力できることに関する質問に対する回答であっても、保育所で通常の保育をしながら行っている子育て支援であるので、保育所保育士の立場から大学への期待が出された。ここでも、大学の教員には専門家として保育所保育についての見直しや職員研修が望まれていた。多様な対応が求められている現場の保育士としての研修の必要性が実感されているといえる。

まとめ

現在、地域全体で子育てを支えていく体制づくりが進められているなかで、様々な領域の専門家集団である大学が地域資源の一つとしてどのように地域に貢献できるか、また現場の支援者(保育士)と大学教員が互いの専門性に資する協働は可能なかを検討した。

子育て支援に対して大学が協力できることはあるかという直接的な問いかけから、親や子に直接関わる直接支援と支援者を側面的に支える間接支援が期待されていることが分かった。子育て支援の現場では、子どもの問題、親の問題、関係性の問題が交錯した形で顕れるため、問題を把握し適切な支援を考える際に他職種の視点や介入が必要になることがある。直接支援のニーズは、そのようなときに他の専門職の協力が得られたらというものである。また、親のニーズに応じて適切な地域資源につなげることも必要になる。その地域資源の一つとして、地域からの相談を受け入れる相談の場が大学に期待されていると言える。

間接支援はすべての保育士が言及しており、ニーズが高いことがうかがえた。大元他(2012)では、保育士から子育て支援とは何かという迷いや対応の指針がないことへの不安が示されている。そのような迷いや不安を抱えながら、保育士は子育て支援の経験から自分の子育て支援の実践を確実に構築している。しかし、自分の実践を相対化して評価する機会がないため、支援者としての成長を実感しにくく、また実践の方向性についての不安につながっているのではないだろうか。大学に支援者対象の情報交換の場を期待するのは、他の支援者との情報交換によって自分の実践を確認し、相対化することを求めているためと思われる。また、事例相談の窓口への期待は、一般的な理論をそのまま当てはめるだけでは、個々の事例に対応することが難しいためと思われる。上述したように、子育て支援における事例は、複数の要因が交錯しており、個別的、具体的な場面に基づいて検討することが必要である。難しい事例では、職場での事例検討だけでなく他の専門職からの視点も含めて検討することにより、新たな気づきや理解が深まり、実践力が高まることが期待されているといえよう。

保育士が工夫・配慮をしていることについての質問からは、3つのことが分かった。1つ目の《集団を運営するための工夫》は、子育て支援の場を親子にとって安心でき楽しい場とし、親と子どもの安定した関わりを援助することを目的としたものである。また、2つ目の《他の地域資源への橋渡し》は、親同士をつなぎ、子育て仲間が広がることを期待したり、親子が必要とする社会資源につなげようとするものである。これら2つの工夫・配慮は、子育て支援の内容そのものであり、保育士としての専門性を生かした質の高い支援を目指したものである。3つ目の《親との関係づくり》のうち初対面の親に対するものは、継続的に参加するかわからない親子を対象とした子育て支援の特性に関連したものである。大元他(2012)においても初対面での関わり難しさが言及されていたが、それぞれの保育士がそれまでの経験の中で自分のアプローチを見出していた。《関係づくりのための聴き方》は、カウンセリング・スキルとしての傾聴であり、支援歴が長い保育士のみが言及していたことから、現場での個別支援の経験を通して意識される

ようになったと思われる。傾聴や応答のスキルは、保育士としての専門性に含まれており、子育て支援に関わるすべての支援者に求められている。大学が子育て支援活動に協力できることとして支援者対象の研修会があげられていたが、新たに子育て支援に従事する保育士や支援経験の浅い保育士がカウンセリング・スキルを習得することに大学が協力できると考える。

今回の調査から、子育て支援者を側面から支援する間接的支援の必要性と重要性が示唆された。また、そのような形で大学教員が子育て支援に関わることは、大学教員も間接的な実践を積み重ねることができるということであり、保育士と大学教員が共に学び合うことができるのではないかと考える。

引用文献

- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートに見る子育て現場と子ども虐待予防
名古屋大学出版会
- 橋本真紀・日浦直美 (2002). 地域子育て支援センター職員の専門性に関する考察 I 聖和大学論集, 30, 1-9.
- 服部祥子・原田正文 (1991). 乳幼児の心身発達と環境－大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- 柏女霊峰・山本真美・尾木まり・谷口和加子・林茂男・網野武博・新保幸男・中谷茂一 (2000). 保育所実
施型地域子育て支援センターの運営及び相談活動分析 日本子ども家庭総合研究所紀要, 36, 29-57.
- 小池由佳・斎藤裕・角張慶子 (2008). 子育て支援の担い手としての保育士の資質と養成のあり方について 県立新潟女子短期大学研究紀要, 45, 85-94.
- 大元千種・大鷲香・渋谷登美子・原田博子・森田理香 (2010). 大学における地域支援に関する調査報告
－子育て支援と発達支援を中心として－ 人間文化研究所年報, 21, 195-208.
- 大元千種・大鷲香・渋谷登美子・原田博子・森田理香 (2012). 地域の子育て支援活動を通して保育士が
感じた難しさと気づき 人間文化研究所年報, 23, 59-70.

付記：本調査研究は、平成22年度筑紫女学園大学特別研究助成による“大学における発達支援、
家族支援の意義と課題に関する調査研究（2）”の報告である。

(おおもと ちぐさ：人間形成専攻 教授)

(おおづる かおる：幼児教育科 准教授)

(しぶた とみこ：人間関係専攻 准教授)

(はらだ ひろこ：幼児教育科 講師)

(もりた りか：人間関係専攻 講師)

